NTS物語

本号より、「会社のあゆみ」について吉田社長が連載する。

一、本を作り始めたころ

吉田　隆

①戦　争

設立間もない昭和六十一年(一九八六年)一月四日土曜日、その日は戦争だった。暮れに封筒詰めのすんだ二本のセミナーのDMを郵便局に届けなければならなかった。セミナーの開催日まで、其々二週間と三週間の猶予しかない。しかも、資金繰りが底をつき両セミナーとも絶対に失敗は許されなかった。DMはできれば暮れに発送しておきたかったが、企画にぎりぎりまでこだわったことが尾を引いた。

少し残っていた封筒詰めのあとは、梱包し郵便局に届けるだけである。社員二人の頃だった。他の二人は出社できず、家内に応援を頼んだ。時間は十分なはずだったが、すぐに終わるはずの封筒詰めが意外に長引いた。六千枚のDMを十個の梱包に分け郵便局に持参する用意が整った時、時計はすでに二時半を回っていた。その頃、本局の土曜の閉局時間は午後三時である。エレベータのない盛和ビルの階段を、まずは五個の荷を両手に一個ずつ抱えて四階から一階まで往復すること三回。赤帽や宅配が普及する前のことで、小口郵便物の持ち込みにはどこも台車を用いていた。一階に常備している台車に積み上げゴムで固定し、局に向い始めた時は二時四十分頃だった。

一回では終わらない。本局まで二往復して時間にぎりぎりだろう。三時を少しでも過ぎると局員の対応が冷たくなることは過去の経験で身に染みている。発送は来週には廻せない。多分焦ってゴムの固定が甘かったのだろう。第一勧銀わきから本郷三丁目の交差点を駆け足で抜ける最中、ゴムが弾け梱包が崩れ落ち二、三個分の包装が破れ、中のDMが交差点の真ん中でばらけてしまった。人目も自動車も憚ればこそ、あわてて封筒を掻き集めるとゴムで無理遣りおさえつけ一旦会社に戻った。

家内に荷の積み直しを指示し、慌ただしく受話器に手をかけた。「どうしても今日出す必要があるDMが事故で時間に間に合わないので少しだけ待ってほしい。」と頼んでも返事はつれない。「来週にして下さい。」「大事な郵便物なので頼むから五分だけ待ってくれ。」「規則だからもう締めます。」「これを出さないと会社がツブれる!」「…」そんなやりとりの後ようやく相手は態度を変えた。「シャッターは降ろすがわきの小窓横のボタンをおすと警備員が顔を出す。事情は自分が話しておく。」一階に降りると家内が不安顔で立っている。再び台車を押して駆け始めた。

もう一度、第一勧銀裏から本郷三丁目交差点へと抜ける。本郷通りを北に五百メートル程上ると本局がある。最初は慎重に、やがて力が入る。小さな台車がゴトゴト揺れる。ゴムの下では三千枚のDMがワサワサ音をたてる。本局に着いてボタンを押すと警備員が顔を出しすぐにシャッターを少し上げてくれた。もう一回あるから十分待ってくれと頼むと、空の台車を押して本郷通りを逆方向に走って会社に戻った。四階に駆け上がり、残った五個の梱包を抱えて往復すること又三回。台車に固定し、本局目掛けて再び走り始めた。本局に着いたときはさすがに息が上がった。

いまでもこの道を通ると、発送を終え空の台車を押しての帰路の、そこを流れる真冬の空気の心地よさが事業への不安を一瞬忘れさせてくれたことがよみがえってくる。このセミナーは二本ともあたった。二十三～二十四日の「コ・ジェネレーション」、二十七～二十八日の「分離技術」共に定員近くを集め、お陰で設立一年目の危機は脱出できた。二週間、で勝負を賭たセミナーはこれが最初で最後だった。二週間で三十名はしばらく仲間内の語り種となった。今にして思えば無謀な計画だったのだろうが、自分の力を無心で信じ込み夢中で日々のやり繰りや時間と戦っていたころのことである。この時期を私と共に歩んだのはS女史、G女史の二名。いずれもNTS最初の社員だった。(つづく)

掲示板

今月の人事

九月二日付退社
九月三十日付退社

社内清掃について

次の日程で、本社事務所内の床掃除を行ないますので宜しくお願い致します。当日休日出勤の予定がある場合は作業に支障がありますので、必ず総務部に連絡して下さい。

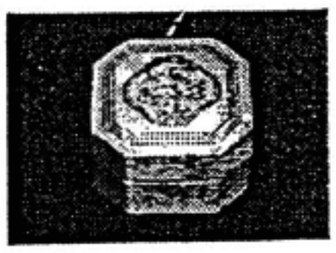
十月二十五日(日)
十一月二十二日(日)

身分証明書

十月一日にて社員の身分証明書を更新しました。該当者には、既に旧身分証明書と引き換えに交付済です。身分証明書は常に携行するようにし、紛失した場合は速やかに総務部まで連絡して下さい。

編集後記

先日、資生堂百三十年の歴史を伝える『美と知のミーム、資生堂展』へ出かけました。会場は落ち着いた色で統一された六つのゾーンから成り、創業から現在に到る化粧品や広告作品などの展示物をたどると、百三十年の歴史と未来像を理解できるよう、工夫された配置になっていました。



また、照明、香り、空調、音にも美を意識した演出がほどこされており、五感が心地よく刺激されました。来場者を幻想空間へいざなう素晴らしい展覧会でした。

さて、本号より当社の歩みを振り返る「NTS物語」を連載することになりました。まだ僅か十数年ですがNTSの歴史も、もうはじまっているのです。

もし、『NTS展』を百三十年後に開くとすれば現在の十四期は、丁度お客さんが見る最初のゾーンにあたります。さあ飾り付けです。皆さんなら何を飾りますか?そして次のゾーンに何を伝えますか。　(伊)

先月号のクイズの回答
答え
正解者

NTSニュース　第四号
一九九八年十月二十五日発行